

「大阪湾の環境保全についての意見を聴く会」における意見等の概要について

1 概要

府計画の変更を検討するに当たり、大阪湾に関わる様々な立場の団体の方（漁業者、事業者、環境保全活動を行うNPO等）10名から、大阪湾の環境保全に関する意見を聴くため、大阪湾に関係する5府県が共同して開催した。

- ・日時：平成27年9月15日（火）14時～16時半
- ・場所：大阪府咲洲庁舎 2階 咲洲ホール
- ・意見発表者所属団体（発表順）
 - 森漁業協同組合（兵庫県）
 - 特定非営利活動法人 プロジェクト保津川（京都府）
 - 三井化学株式会社 大阪工場（大阪府）
 - 大和川市民ネットワーク（奈良県）
 - 須磨海岸を美しくする運動推進協議会（兵庫県）
 - 大阪府漁業協同組合連合会（大阪府）
 - 和歌山県漁業協同組合連合会（和歌山県）
 - 株式会社 海遊館（大阪府）
 - NPO 法人 釣り文化協会（大阪府）
 - 尼海の会（兵庫県）
- ・司会進行：中西敬氏（徳島大学大学院・近畿大学非常勤講師）
- ・主催等
 - 主催：京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県
 - 共催：瀬戸内海環境保全知事・市長会議
- ・参加者数：約100名

2 意見等の概要

（森漁業協同組合）

- ・大阪湾全体の漁獲量は昭和50年代中頃から7割以上も減少している。ノリ養殖でも平成10年頃から栄養塩不足による色落ちが発生し、平成10年頃から被害が拡大している。年々大阪湾が枯れていくのは栄養塩不足が原因と考えている。
- ・豊かな海づくりのため、漁業者が海底耕耘やため池のかいぼり等を行っている。また、下水道関係者が栄養塩補給を行うための管理運転を行っており、大阪湾関係府県においても府県計画への反映をお願いする。
- ・湾奥部以外では水質規制が効きすぎていると感じている。湾奥部の水質が改善しない原因はアイランド方式の埋立により海水が停滞し、栄養塩が沖合に移動しにくいからだと思う。埋立間水路の海水交換を促進し、湾全体の流れを回復させるような手立てをお願いしたい。
- ・河川でのダムや堰の整備により里海への砂の供給が減り、二枚貝や底魚が育たない。藻場・干潟・砂浜の再生について、府県計画に盛り込むようお願いする。
- ・台風や大きな地震が起きた年や翌年にはノリの生産高が上がっている。これは、陸水の供給や海の攪拌により栄養塩が供給されたためではないかと思っている。栄養塩補給をお願いする。

(特定非営利活動法人 プロジェクト保津川)

- ・保津川（桂川）において、近年、水質やごみの問題が深刻化している。対策を進めるため、NPO を立ち上げた。
- ・2012 年には、内陸部では初開催となる、第 10 回海ごみサミットを亀岡で開催した。
- ・亀岡で発生した川のごみがどれくらいで海に流れ着くか調査したところ、増水時には 1 日で大阪湾に達することがわかった。
- ・2013 年から、地域の方や事業者、学校関係者などと共に「川と海つながり共創プロジェクト」として、川や海のごみを減らす取組をスタートさせた。環境教育・啓発事業が重要と考えており、親子ペアで河川や海岸における漂着ごみの実態調査を行う「こども海ごみ探偵団事業」などを実施している。
- ・内陸部からの漂着ごみの発生抑制や、それを通じて海と川の間について地域と一緒に考えている取組を進めているところであり、「熱心だけれども、バラバラ」だった地域の取組が、「海ごみ」という共通のキーワードで、地域全体の取組みに発展しつつある。
- ・桂川や鴨川では大阪湾からのアユの遡上の復活に向けた取り組みも始まっている。そのためには沿岸域や上流域も含めた流域全体での連携が必要であり、大阪湾再生の方向性に加えてほしい。

(三井化学株式会社 大阪工場)

- ・大阪工場は昭和 39 年に操業を開始した。アンモニア工場があるので、排水中の窒素処理が課題となってきた。
- ・三井化学グループが貢献すべき社会課題の一つに「環境と調和した共生社会の実現」を位置づけ、水質保全の取組みも進めてきたところであり、第 5 次から第 7 次総量規制にかけて約 6,500kg/日の窒素を削減した。第 7 次総量規制に対応するため、次世代窒素処理技術であるアナモックス窒素処理設備を導入し、順調に稼働している。国内で稼働しているアナモックス処理設備は当社だけである。
- ・国内におけるアンモニア・尿素事業は、グローバル化に伴い厳しい状況にあるが、引き続き、社会と環境の調和を図るべく、水質環境保全に努めていきたい。
- ・今後も、大阪湾における窒素・りん等の水質規制の強化について総合的見地から判断をお願いしたい。
- ・地元の子供を対象にしたスポーツ大会・化学実験教室の開催や、近隣各社等と連携して「大阪湾クリーン作戦」として栈橋周辺を清掃するなど、様々な地域貢献活動を行っている。

(大和川市民ネットワーク)

- ・大和川水系では 60 年前には多くの人が泳いだり、魚を捕ったりしていたが、高度経済成長の時代から水質が悪化し、全国ワースト 1 や 2 等が続いた。下水道整備等により水質の改善が進み、ここ数年は BOD も 5 mg/L 以下になり、アユも復活してきた。富田林高校科学部では、支川の石川にもアユを遡上させるために取組んでいる。
- ・途絶えていた住吉大社の神輿のお渡りが、大和川付け替え 300 周年の 2004 年に復活した。
- ・大和川流域で環境問題に取り組んでいる各団体や個人が交流・協力する場として、2008 年に「大和川市民ネットワーク」が発足し、小学生の副読本「わたしたちの大和川」の改定に向けた取組や、下流の堺での生物観察会、美しかった大和川を故郷の誇りとしていた与謝野晶子の歌碑を浅香付近に設置するなど、様々な活動を行っている。
- ・大和川の水質が良くなり、昔のように多種多様な生物が生息するためには、上流域の奈良県の森林の保全が必要と考えており、ひいては、大阪湾の水質や環境の保全につながるものと考えている。

(須磨海岸を美しくする運動推進協議会)

- ・須磨海岸は日本の白砂青松 100 選や日本の渚 100 選にも選ばれており、古くから美しい海岸として親しまれてきた神戸のシンボルである。
- ・阪神間の唯一の自然海岸を活かした海水浴場で、今年も 72 万人もの来場がある一方で、様々な問題を抱えている。最も困っているのがごみの問題である。海水浴客は、以前は海の家で食事をしてきたが、今は飲食物を持ち込む人も多く、ごみの放置が目立つ。
- ・1973 年に区内の自治会連合会や連合婦人会等により、協議会を立ち上げ、今年で 43 年目を迎え、平成 27 年春に緑綬褒章を受章した。
- ・協議会では、海水浴期間前後に年 2 回のクリーン作戦と、ゴミの持ち帰りを促すキャンペーンを実施している。1 回目のクリーン作戦は海水浴シーズン前に開催し、企業が力を入れていただいていることもあり、6000 人以上が参加している。親子連れでの参加が多く、家族間のコミュニケーションの機会になっていると考えている。
- ・今後に向けては、クリーン作戦を子どもから高齢者まで広い世代の人が集い環境美化を通して交流する場へと発展させていくことが最も重要と考えている。

(大阪府漁業協同組合連合会)

- ・大阪湾の環境を改善するために一番必要なことは窪地の埋戻し。2 つめは干潟の整備。3 つめは水質の基準の見直しである。泉佐野漁協では平成 10 年頃は常時 60 種の漁獲物が水揚げされていたが、今は半分の 30 種程度に減少した。
- ・対策を国に働きかけているが、自分達でしたほうが早いということで、漁業者自ら海底耕耘や清掃等を行っている。海底耕耘により稚魚が寄ってくるが、窪地があるため、夏場の水温上昇に伴い貧酸素水塊が発生し、稚魚が死んでしまう。
- ・窪地の埋め戻しについては長年国に働きかけてきたが、現在、2 箇所しか手をつけられていない。最大の窪地は貝塚の阪南 4 区沖のもので、貧酸素水塊が最も発生する場所である。また、沿岸部の埋立てによって潮が流れず、水温が上昇することにより発生したプランクトンの死骸が窪地にたまり、それが分解されて酸素が無くなり貧酸素水塊が発生しやすくなっている。
- ・組合ではアマモを植えており、アマモが育っているところは稚魚も育っている。アマモが育つためには干潟、砂浜が必要であり、失われた干潟や、砂浜を取り戻せる対策を国に働きかけていきたい。また、水質の基準についても国に働きかけ、魚介類にとって栄養分のある水を大阪湾に流してほしいと思っている。

(和歌山県漁業協同組合連合会)

- ・和歌山県において大阪湾に属しているのは、加太から田倉崎までのごくわずかな海域であるが、瀬戸内海として捉えると、紀伊水道と大阪湾は一体であり、古来より海の恵みを共に享受してきた。近年、紀伊水道における漁獲量は減少の一途をたどっている。
- ・シラスは和歌山県の重要な漁獲物のひとつで、その大半は機船船びき漁業で漁獲される。主漁期は 3～5 月で「春シラス」と呼ばれ、外海で発生し、紀伊水道に来遊するシラスを漁獲している。瀬戸内海域のシラス漁は「夏シラス」と呼ばれ、瀬戸内海域で発生するシラスを夏～秋に漁獲する。
- ・近年、シラスの漁獲量は減少しているが、漁船数も減っているため、他の漁業と比べると減少幅は小さいと考えている。
- ・和歌山のシラス漁業において、瀬戸内海は漁場として重要なことは言うまでもなく、漁獲資源の発生源としても非常に重要な海域である。

(株式会社 海遊館)

- ・2009年からスナメリの調査を行っている。
- ・大阪湾で見られるのは岬町～岸和田市沖に限られ、関空島周辺が多い。春から夏には親子で泳ぐ姿も確認され、繁殖場として利用されていることが考えられる。
- ・大阪湾における調査例は少なく、過去の分布や生息数は明らかではないが、漁業者からは今は昔ほど見られなくなったとの声が多い。50年ほど前には堺沖でよく見られたとの証言も複数あり、湾奥にも多数生息していた可能性がある。
- ・生息数減少の要因としては、浅場の埋立や底質・水質の悪化といった生息場所の破壊や、漁業による混獲、船舶の影響、残留性化学物質の影響等が考えられる。
- ・スナメリがすみやすい海を取り戻したい。スナメリが好む浅場の再生は、スナメリだけでなく人が利用する魚介類を増やすことにつながる。浅場は水を浄化し、人と海の接点でもある。調査を通してスナメリとその生息環境の保全に役立てると共に、豊かな大阪湾のシンボルとしてスナメリをアピールしてゆきたい。
- ・海遊館周辺では夕日が美しく、多くの人が集まる。海の生命をイメージした冬場のイルミネーションも集客につながっている。臨海部の景観を活かした利用という面で、海と命のつながりを感じる憩いの空間や時間を創出することも海遊館の役割と考えている。

(NPO 法人 釣り文化協会)

- ・新しい基本計画において、遊漁者も資源管理において一定の役割を果たすことが盛り込まれた。
- ・釣り人が漁業者に迷惑をかけているという例があり、これまでも、淡路島のアオリイカの繁殖期における釣りの自粛や、体長制限、過度な撒き餌の自粛などに取組んできた。今後も体長制限については、周知させる必要がある。
- ・海は確かにきれいになったが、魚達の生活、言い換えれば釣果にとって良いのか疑問がある。
- ・透明度が高い時期が長く続くことや、5月の長雨のあとに釣果が上がること、回遊魚の群れが小さいことなどは貧栄養のためではないか。
- ・夏場、湾奥の水温が高くなるにつれ小アジ等の泳層が極端に浅くなることや、8月25日頃に直立岸壁のイガイの層が剥落することは貧酸素の影響ではないか。青潮の発生も確認したことがある。湾奥では、風向きによって釣果が変わり、航路筋でも貧酸素があるようだ。
- ・釣り人ができることとして、ごみ回収や大型ごみ発見時の通報等があるが、ごみの処理が自治体によっては有料となることや、通報先が分からない等の課題がある。漁協や行政とどのように連携していくかも課題であると思っている。

(尼海の会)

- ・官民学が共同で、尼崎の海をきれいにする取組を進めている。中学生が中心となり、学校や地域が協力している。これまで、海と運河の過剰な栄養を循環させたら、環境にもよいし、みんなも幸せになるという考えのもとで取組んできた。
- ・パドルボードで運河を楽しむ活動や、大学の協力を得て栽培したワカメや直立護岸で繁殖する貝を使って堆肥を作り、ニンジンやミカン、枝豆などを栽培する取組等を行っている。
- ・埋立地に「のびのび公園」があり、ごみの不法投棄などが問題となっている。なんとかしようということで、生徒・市民、尼海の会、企業が連携して取組んでいる。作成した堆肥を使って菜の花を栽培したところ、菜種が8kgとれたので、油を採取し、調理をして、その廃油を精製し、車の燃料とした。
- ・菜の花の後にはひまわりを植えた。夕日をバックにひまわりが咲いて、すばらしい景色となり、地域の方からも感謝の声を頂いた。
- ・これからも、なにわの海と命の教育をしていきたい。環境教育などのすばらしい研究・教育財産となっている。海の教育の特区にしたいとも思っている。